

## “阿南の光”長野に S O前夜、まちづくり協がオブジェ設置

「スペシャルオリンピックス（S O）冬季世界大会」開幕前日の二十五日夜、阿南市の光のイベントで使われた発光ダイオード（L E D）のオブジェが長野市内に登場した。

阿南光のまちづくり協議会のメンバーら五人が長野市入りし、大会参加者やボランティアの交流会場となる長野J Aアクティ―ホール玄関ともんぜんぷら座の壁面に、三角すいオブジェ（一辺二メートル）五基と雪の結晶（直径一・五メートル）五十枚、球体（直径三十センチ）十個を設置。午後五時に白、緑、青、赤の四色のL E D約五万個が点灯すると、通行人らが立ち止まって見入っていた。

設置場所の前では、協議会が阿南市の観光パンフレットや光のドームの写真を使ったカレンダーなどを無料で配って「光のまち・あなん」をP Rした。オブジェは大会最終日の三月五日まで点灯する。

【写真説明】光のオブジェに見入る長野市民＝長野市北石堂町の長野J Aアクティ―ホール前（阿南光のまちづくり協議会提供）



## S O長野大会□ 理解や支援を広げたい

知的発達障害者のスポーツの祭典「スペシャルオリンピックス（S O）冬季世界大会・長野」が、きょうから八日間、開かれる。「皆で集い、共に楽しむ！」が合言葉。アジアで初の世界大会を、障害者への理解を深め、自立や社会参加を促し、支援を広げる契機としたい。冬季大会では最多の約八十の国と地域から、約二千七百人の選手団が参加し、スキーやスケートなど七競技、七十九種目で熱戦を繰り広げる。選手の家族やボランティアなどを合わせると一万人を超える人々が長野県に集い、交流を深める。

日本選手団は百五十人。うちアスリートと呼ばれる選手は百九人で、徳島県からは、勝浦町の福田雅浩さん（20）がアルペンスキーに出場する。福田さんは「自己ベストを出して、金メダルをもらいたい」との抱負で、本番に臨んでいる。活躍を期待したい。S Oでは、知的発達障害のある人たちが、オリンピック競技種目に準じたスポーツに挑む。夏と冬の世界大会は、オリンピックと同じように、それぞれ四年ごとに開催されている。

障害者のスポーツ大会として知られるパラリンピックに比べ、一般的になじみが薄いものの、国際オリンピック委員会が唯一、「オリンピック」という名称の使用を認めた大会だ。

S Oは、故ジョン・F・ケネディ元米大統領の妹で、知的障害者の姉（今年一月死去）を持つユニス・ケネディ・シュライバーさんが、一九六三年に自宅で開いた知的発達障害者のデイキャンプがきっかけとなった。六九年の全米大会を機に夏季世界大会が始まり、七七年からは冬季世界大会も開かれている。

長野大会をP Rし、機運を盛り上げようと、全国各地で行われたのが、聖火リレー「五百万人トーチラン」である。

徳島県内でも昨年十一月の小松島市を皮切りに十市町で障害者三百二十七人、伴走者三千百五十四人が、計五十キロのコースを走った。ボランティアや沿道から声援を送った人たちも加えると、参加者は約三万人。飯泉嘉門知事をはじめ、多くの首長らも実行委員会のメンバーとしてトーチランを支えた。

また、阿南市の光のイベント「光マンダラ」で使った発光ダイオード（L E D）が、所有する阿南商工会議所によって大会に提供されている。選手や地元の人たちが交流し、思い出をつくるS Oタウンに飾られた光のオブジェが、大会の盛り上げに一役買うのもうれしい。

S Oは、記録を競い、メダルの争奪にしごきを削る五輪や、障害者と健常者の共生を目指しながらも競技性が高まる一方のパラリンピックとは性格を異にする。最も重要視されるのは「いかにベストを尽くしたか」である。

競技は、同程度のレベルの者同士で行い、メダルを逃したアスリートにもリボンが贈られ、全員が表彰される。大会を支えるボランティアらも、アスリートたちの頑張りから勇気や元気をもらい、優しく、明るくなれるという。

知的発達障害者の人権を無視した偏見や差別は、依然として根強い。大会実行委員長でS O日本理事長の細川佳代子さんは昨夏、徳島市内で講演し「S Oを障害者に無理解、無関心な日本社会を変えるきっかけにしたい」と話した。こうした思いを実現する大会にしたい。